鈴木大拙の日本的霊性と道徳教育

○岩瀬　真寿美（同朋大学）

はじめに

現代日本の道徳教育における「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念」は知性的に把捉できるものなのか、あるいは情的に把捉できるものなのだろうか。鈴木大拙の日本的霊性はこのいずれとも異なる概念であり、この概念は「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念」の内実の理解を促す。本発表では、学習指導要領の人間観と大拙の日本的霊性を通して、道徳教育の「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の内実を詳細に検討する。

１．学習指導要領の人間観

学習指導要領解説では、人間は弱さを持つものであり、その弱さを強さに、醜さを気高さに変える自信や自己肯定、よりよく生きる喜びを見いだすことを理想の人間像としている。また、道徳性を、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度と便宜上分け、その内、道徳的心情を「善を行うことを喜び、悪を憎む感情のこと」と捉える。このように、人間を発展的に捉え、また、善と悪をはっきりと区分する人間観を有している。

道徳の教科化は、いじめの予防としての意味合いも大きく、また、道徳教育に関わらず、現代社会に生きる子どもたちをめぐる環境として、人工知能（AI）の出現により、将来、人間から職業が奪われるのではないか、現在の学校の授業は、将来どのように役に立つのかという課題が挙げられている。そのため、「資質・能力」、「主体的・対話的で深い学び」というキーワードや、特に道徳教育に関して言えば、知識及び技能として、価値理解・人間理解・他者理解、思考力・判断力・表現力等として、多面的・多角的に考えること、自分のこととして考えること、学びに向かう力・人間性等として、自己の（人間としての）生き方を考えることが提唱される。このような、人間理解や自分のこととして考えること、自己の（人間としての）生き方を考えることというのは、科学的知のみに頼ることができるものではない。

さらに、学習指導要領解説では、「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念に根ざした自己理解や他者理解、人間理解、自然理解へとつながっていくようにすることが求められる」、「人間としての生き方についての自覚は、人間とは何かということについての探求とともに深められるものである」と、哲学的な人間理解の方法を求めている。特に「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」については、「自己を生命や自然、美しいもの、気高いもの、崇高なものとの関わりにおいて捉え、人間としての自覚を深めることに関するものである」と解説しており、自己を知ることが、自然や崇高なものをも含む他者との関わりを前提としたものと捉えていることがうかがえる。

以上、学習指導要領には、人間は弱いものであるが強く気高い人間へと発展することができる

という進化論的な人間観、人間を探求することによって人間としての生き方を自覚できるという哲学的な人間観、自己を単独で知るのではなく自然や崇高なものをも含む他者との関わりを前提に知るものであるという関係論的な人間観という特徴がある。

２．大拙の日本的霊性

『鈴木大拙全集　第八巻』を主に参考にすると、大拙の日本的霊性とは、般若すなわち智慧を言い換えたものであり、般若は知的面と情的面に分析できる。これは目に見える何かではなく、その働きに名称を付けたものである。戦争中に執筆されたとは言え、現代日本の道徳教育を考える上で示唆的である。日本的霊性の「日本的」を強調するのではなく、「霊性」の方を強調し、「日本的」という語に政治的あるいは国家主義的な意味合いを含んではいないとする。日本的霊性は鎌倉時代に大きく具象化し、特にそれは禅宗と浄土真宗に認められるという。それ以前の平安時代においては感情性が大きく、この上皮層が崩れ霊性の中枢が動き出たのが鎌倉時代であり、仏教から霊性が出現したのではなく、日本人の中に霊性が存在し、それが仏教的な表象の仕方として現れ出たと捉える。表１は、日本的霊性の二側面を大拙の著作に沿って整理したものである。

日本的霊性	
禅宗	浄土真宗
知的直観（大円鏡智）	情的直観（成所作智）
感性と情性の上に働く	意欲（行為、所作）の上に働く
臨済	法然上人に目覚めて、親鸞聖人に引きつがれる。妙好人。
概念性	具象の一一
超個の人の方向に個己を見る（一無位の真人）	個己の方向に超個の人を見る（親鸞一人、われ一人）
武家階級	庶民階級

表１．日本的霊性の二側面

表１を通して分かるように、知と情、概念と具象といった違いは即によってつながるものであり、大智即大悲、大悲即大智である。霊性は大地に深く根を下ろし、その大地を天と比較して、大地は親しむべく愛すべき、生まれるのも大地、死ねばそこに帰るところ、母、愛であり、忍耐を教える大教育者、大訓練師と捉えている。また、心を二つに分け、意識と末那識、もう一つが霊性すなわち般若と捉えており、般若においては、あらゆるものが平等であり、知性を超え、自在・自主・自由が可能となるとする。

終わりに

発表では、日本的霊性に基づく「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念」、日本的霊性に基づく自在・自主・自由の様相、そこから見る「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の内実について検討を深める。